

生存科学研究 二二一入

VOL. 8. NO. 1. 1993. 1. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

会員研究会 「生死と生存」第4回 南の国日本

11月6日(金)午後2時より、会員研究会「生死と生存」第4回が開催され、表記の演題で報告がなされた。講師は、昭和32年から東南アジアの熱帯雨林の調査を続けている、大阪市立大学名誉教授、大阪市立自然博物館顧問の小川房人氏。

氏は、OHPで、日本の照葉樹林、落葉樹林、針葉樹林の分布、大阪と同じ北緯34~35度の地球上の植物分布を示し、日本は気温にも湿度にも恵まれ、北から南まで全域に森林があるが、これは先進国では稀なことであり、乾燥気候のことが意識に入りにくいので、乾燥地の施策を考えるときそこを間違えてはいけないこと、日本ではこの気候のため作物以外の植物が繁殖し易いので、農業は薬物の多用による環境汚染型にならざるを得ず、それを避けるには労働集約的となりコストが高くならざるをえない、と述べた。

また、森林破壊が人口増加による農地開発の進展によることが多いこと、マスコミのキャンペーンで、森林を荒らさないできた企業が排除され、かえって森林破壊を進めてしまったことを紹介し、良く知らないものが知っているつもりでやると間違いが起こること、熱帯林の保護は大切だが、これは生物が作っ

たもので、人工の物質と違い無害であり、資源保護と利用の両立を図ることが必要であること、生物資源を使うときには経済コストを優先しないで、経済コスト・プラス環境コストを考えなくてはならないと強調した。

第4回東西の健康観・医・薬研究会 中国古代・中世の疾病と薬物の認識

11月6日(金)午後1時より表記のテーマで、大東文化大学文学部教授、林克委員と、北里研究所付属東洋医学総合研究所医史文献研究室、真柳誠委員により報告がなされた。まず林委員より「五臓の五行説にみる解剖学的認識」と題して、中国古代の五行哲学にもとづく「五臓」の五行配当に対し、それが解剖学的の根拠をもつことが解説された。「古文説」ではヒトが南を向いて腹臥位になったときの臓器の位置、「今文説」では四時と五臓に対する陰陽的解釈にもとづき五行配当がなされている。

ついで真柳委員より「中国医学の薬理観と臓腑認識」として、中国医学における薬理観の特徴としての、治療法との一体性、主観性、臨床レベルでの「薬理」の軽視、などが挙げられた。また、食中毒との関連、さらに、刑屍解剖にもとづく解剖図の流布にともなう病理観の色彩の薬効表現への入り込みというユニークな仮説が提示された。

五行説は表面的類似により理論構成されているが、思考の迷路に陥っているのではないが、現実の解剖所見と伝統的認識の整合性をとり思想の連続性を保とうとする中国人の思惟方法の是非などが大いに議論された。

第3回 生存秩序と人間関係研究会
生存的調和を探る
—関係的秩序の創出とホメオスタシス—

11月20日(金)午後6時より、表記のテーマで東京大学薬学部教授、清水博氏の報告がなされた。

氏はまず、薬を考えるうえで生体が生きているという状態を科学的に把握する必要があると考えたこと、それは個々の細胞レベルではなく、細胞、器官、個体、家庭、社会、生態系と色々なレベルがあり、集まったものを意味する、生きていることの一般的、普遍的法則は、秩序を自分で作るということであると述べ、ついで生命の秩序について、結晶のような安定した静的構造ではなく、動的な構造で、他と協調する、それに大枠を懸ける遺伝子にも自由度があり、あるアローワンスのなかのフレキシビリティで、夫々が異なる役割を果たす多数の集まりの中での秩序である、と述べた。

さらに、生物が環境の変化に対応するには多数の中から適者が生存する方法と、自分の中に持っている変化で対応するという方法とがあるが、後者の原理(理法)は「即興劇の原理」といえるようなものである、とし、例えば細胞のように関係により役割が決まるものを「関係子」と呼び、これをを役者に、「関係」を即興劇に、「環境」を観客に例えながら、その際の役者間の「時間の共有」、観客からのフィード・バック、筋へのフィード・フォワード等について説明し、(遺伝的に)原形が決まっている筋を変えるには、観客も自分もうまくいく筋を見付けることが必要で、それには観客の中に自分を入れて考えることが必要であり、これは西田幾太郎氏

も言っている「場の理論」である。今までの自然科学は主語論理であるが、これからは述語論理の科学を作ることが必要である、と強調した。

会員研究会「生存と経済」第4回
生命倫理と医療政策
政策形成の合理性を目指して

12月1日(火)午後3時より、表記のテーマで、三菱化成社会生命研究所室長米本昌平氏より報告がなされた。

氏は、脳死臨調を例に引き、日本のポリシーメイキングは霞が関に閉じ込められていて、政策形成能力が議会になく専ら官僚により、そのため行政コストは安く上がるが、外部からみて意志決定が不明瞭に見え、非民主的といえる、とし、日本の権力構造の機能的本体は構造化されたパターナリズムであり、今後は政策志向的調査が必要である、と前置きしてから、バイオエシックスの科学的考察をおこなった。

まず、アメリカのバイオエシックスが実学的で問題志向的であることを指摘し、その発展の背景である医療の変貌、ニクソンの保健政策、アメリカの統治構造を説明した。ついで、バイオエシックスの機能論的分類として、医師・患者間(患者の権利)、医師・医師関係(委員会報告のガイドライン化)、社会受容(委員会報告の立法化)の3つのレベルの意志決定機能を挙げた。最後に、個人を尊重するアメリカとかなり事情の異なるイギリス、フランス、ドイツについて紹介し、日本では識者が勉強して常識的なところに落す方式だが、これからは基礎的研究がなければ世の中は動かない、と指摘した。

生存科学研究所
西日本シンポジウム'92
21世紀の健康都市大阪を目指して
—都市化への健康政策—

12月5日(土)午後2時より、生存科学研究所西日本センター主催の第1回西日本シンポジウムが表記のテーマで、大阪府医師会の後援を得て、大阪府医師会館において開催された。生存科学研究所が主催する公開講演会は、1986年、大阪での第1回以降毎年各地で行われてきたが、西日本センターの本格的活動開始により、これを皮切りに今後は東京でのシンポジウムと合せて毎年西日本でも開催される計画になっている。

シンポジウムは、西日本センター責任者、山口正民副理事長の挨拶とビデオ『生存』の上映に始まり、以下の4つの講演が行われた。

講演第1席は、大阪府医師会会長、植松治雄氏による「大阪府の地域医療の現状と将来」。氏は、大阪における地域医療の資源配分、今後高まる高齢化対策に対する人材確保、開業医の高齢化による機能低下等の問題を論じ、発想の転換だけでなく行動の転換が必要であると主張した。

第2席は、大阪府成人病センター、日山興彦氏による「大阪のがんの現状」。氏は、詳細なデータにもとづき、大阪の悪性新生物死亡率の高さ、中でも肝がんの高さを注目し、肝集団検診システムによる早期発見の重要性を指摘した。

第3席は、京都大学経済学部、西村周三氏による「地域住民の健康と経済的視点—医療費の地域格差と患者サービス」。氏は、同居率が高いほど医療費が低いというデータが医療需要の潜在を示している可能性を例に取り、治療費の地域格差から地域住民のライフスタイルをかいま見ることができるとし、経済マインドにとらわれ過ぎると判断を間違う危険があると主張した。

第4席は、大阪大学医学部教授、森本兼囊氏による「ライフスタイルと健康」。氏は、どういう遺伝的遺産を子孫に残せるかは、例えば喫煙など簡単な指標から窺い知れるライフスタイルによること、それ等の指標の遺伝子への影響は染色体変異の数で分かること、

精神的健康が身体的健康に大きく左右されることを紹介し、これからの医療は、全ての人を対象としなければならない、と結んだ。

第3回武見奨励賞授賞式 大林・津谷両氏受賞

公益信託武見記念生存科学研究基金が2年毎に授与している武見奨励賞の、平成4年度授賞式は、11月17日の選考委員会の選出、運営委員会の決定を経て、12月19日(土)午前10時より研究所会議室において関係者多数参列の中で行われた。

今回の受賞者は産業医科大学講師、大林雅之氏と、東京医科歯科大学難治疾患研究所助教、津谷喜一郎氏で、大林氏は「『生存科学としてのバイオエシックス』に関する科学哲学的研究」と生存研「生死と生存」研究会での活動、津谷氏は「伝統医学の国際的普及・発展活動」、「難治性疾患を含む各種疾患に関する臨床試験の方法論の開発」と生存研「東西の健康観・医・薬」研究会での活動等を高く評価されての晴れの受賞。受賞後列席者から、生存科学研究への示唆に富んだ激励の言葉が述べられた。

なお、記念賞に向く方が推薦されていたり、受賞者の数の制限から受賞に漏れることもあるので、次の機会に再推薦も受け付けることが合意された。

1993年度・武見フェロー 日本からの推薦者決定

11月24日第1次(書類)、12月8日第2次(面接)の選考委員会を経て、日本からの1993年度推薦武見フェローは、結核予防会研究所国際研修科長、松田正己氏と決定された。氏は、タイ国、マレーシア、北イエーメン他数国の調査・保健医療協力へ参加の経歴を持ち、研究テーマは「保健分野における国際協力の人材育成の研究—結核国際研修の評価を例として」。

別府市 街づくりプロジェクト
基本構想懇談会

12月24日(木)午後1時より、九州プロジェクトの別府市街づくりプロジェクトが生存科学研究所会議室において第1回基本構想懇談会を開き、生存研としての基本方針の確認、10月の別府訪問の成果や「別府市基本構想」などを参考にした討議、各委員の意見開陳が行われた。

研究所日報

11月16日(月)	編集委員会
11月24日(火)	川崎病研究委員会
同	東北プロジェクト 盛岡現地研究会
11月28日(土)	安家を考える会
12月3日(木)	日米委員会
12月6日(日)	九州プロジェクト 肝属現地研究会
12月11日(金)	編集委員会

訃報

11月11日、熊谷洋理事長がご逝去されました。

12月15日、大江精三顧問がご逝去されました。

武見太郎先生の思想を深くご理解され、生存科学研究に強力なご指導を賜った両先生のご他界は、研究所にとって極めて大きな損失であります。しかし、ここ数年、両先生はじめ会員諸先生のご努力で、研究所の活動はその拡がりともまると奥行とを増し、生存科学の研究らしい様子を見せ始めています。それがさらに実を結ぶ努力を続けることを心に期して、両先生の御冥福をお祈り申し上げます。

ハーバード大学武見講座活動報告
報告者 吉田フェロー

Takemi Forum	
12/8	Safe Motherhood and Family Planning /C.Gardiner
12/14	Human Helminth Parasites, The Water Connection /L.Obeng
US-JAPAN Program Seminar	
10/29	Japan's Low Cost Egalitarian Health Care System: A Model? /J.C.Campbell
Takemi Program Seminar	
10/27	Conflicts over Health Policy in South Africa /J.Myers
10/30	Problems of Primary Health Care in the Slums of Nairobi /J.V.Valadez
11/2	Global AIDS Health and Human Rights /J.Mann
11/9	Training Health Professionals Step by Step /C.Wood
11/16	Mapping the Processes of Health Decisions /M.R.Reich
11/23	A Fear of Medicine: Beginnings of Health System Reform in Russia /P.Berman
11/30	Improving Drug Supplies for Tuberculosis Control Programs /D.E.C.Weil
12/7	Health of the City Program in Cambridge /D.Bor
Takemi Luncheon	
11/5	Weekly Luncheon
11/12	Preliminary Research Presentation /P.Mohankumar
11/17	/D.Obikeze & T.Yoshida
12/3	Report on the "New Diseases Group" /I.Eckardt
12/10	Weekly Luncheon
12/17	Weekly Luncheon